

# 実践構想

## 「院生（修士1年）の研究テーマ」

1年次生15名の研究テーマについてYouTubeによる動画配信を行い、各院生が自身の研究テーマについて説明した。本項では、其々の実践構想をまとめたポスターを掲載する。

	院生氏名	研究テーマ
学習 デザイン ・ 現職	① 大野 拓也	高等学校公民科における探究学習の実践での成果と課題 －自ら問い、自ら考える生徒の育成を目指して－
	② 角 亜紀子	物語を深く読むための言語技術の学習プロセス
	③ 浜田 洋平	多面的・多角的な思考を促す問いと授業の開発 －パフォーマンス課題を通して－
	④ 三浦 彩	中学校数学科の数学的活動における生徒による ICT 活用の有用性 －SAMR モデルに拡張型学習を取り入れた視点から－
	⑤ 柳澤志貴武	思い付きを育てる美術の授業デザイン －発達段階に応じた環境の構成に着目して－
学習 デザイン ・ 学卒	① 漆田 健	中学校数学科図形領域における統合的・発展的に考える力の育成 －単元を貫く問題作りを通して－
	② 染谷 直希	高校生が環境に対して科学的に理解し論理的に説明できる授業方法
	③ 高橋 大佑	高等学校数学科における概念定義と概念イメージの融合を促す授業デザイン
	④ 長 寛彰	理解型授業を用いた生徒の多面的・多角的思考力の育成を目指した実践研究
	⑤ 坪田 拓都	中学校数学科の授業における ICT 機器を用いた 思考力・判断力・表現力の育成
	⑥ 松岡 歩実	小学校外国語科において伝えたい内容を伝えられる子どもの育成を目指した授業デザイン
学校 マネジメント ・ 現職	① 北川 直美	「支え合い・共に生徒を見る」校内体制づくり －「生徒理解の会」の機能化を目指して－
	② 小町 成美	サードプレイスの機能を有する若手教員育成プログラムの開発
	③ 田中 天真	学級経営の基盤となるよりよい対人関係づくりの一考察 －相互授業交流を核とした日常的取組を通して－
	④ 中屋 順子	個業から協働への変革を促す学年主任のコーディネートのあるあり方 －中規模特別支援学校小学部の学年会を中心とした取り組みを通して－

# 高等学校公民科における探究学習の実践での成果と課題

—自ら問い、自ら考える生徒の育成を目指して—

学習デザインコース：大野 拓也  
指導教員：加藤 隆弘・米倉 敏広

## 1. 研究の目的

高等学校における「主体的・対話的で深い学び」となる為の授業改善の在り方を、「公民探究」における質問づくりとふり返し活動を行った授業実践をとおして提案する。

## 2. 研究の背景

授業で感じた問題点

- ① 学ぶ姿勢が受け身
- ② 学びを深めることができていない
- ③ 学ぶことの意義を見いだせていない

授業実践を通して目指す生徒像

- ① 自ら課題意識を持ち、考える生徒
- ② 学びをふり返し、考えを再構成できる生徒
- ③ 自分の学びに自信をもつ生徒

## 3. 研究の方法

(1) 授業デザインの方策 質問づくりを起点とした探究活動+ふり返し活動



(2) 研究計画 (授業実践計画及び検証計画)

	I期 (4～5月：実態把握期)	II期 (6～7月：発展期)	III期 (8月：自己実践期)	IV期 (9～10月：充実期)
教師の役割	活動の目的・意義の確認		リフレクションシートへのフィードバック 活動の観察・動画の撮影・ポートフォリオの作成	
質問づくり	クラス全体	個人	個人	グループ
生徒の活動	質問づくりワークショップ ↳ 探究活動	探究活動 ↳ ポスターセッション 小論文	探究活動 (自宅) ↳ オンライン発表会	探究活動 ↳ 公開討論・模擬投票 ディベート
予想される生徒の反応	戸惑い おもしろさ (やりがい)	課題意識 (難しさ) 慣れ (習慣化)	学習観の変化・取り組みに対する自信 新たな課題意識	

# 物語を深く読むための言語技術の学習プロセス

学習デザインコース 角 亜紀子

指導教員:本所 恵・米倉 敏広

## 1. 研究の目的

言葉・文・文章への着目の仕方を言語技術として身に付け、  
解釈を深めるために、どのような指導の工夫が有効か、子どもの学びの過程から明らかにする

## 2. 研究の背景 国語科・物語教材の授業の難しさ

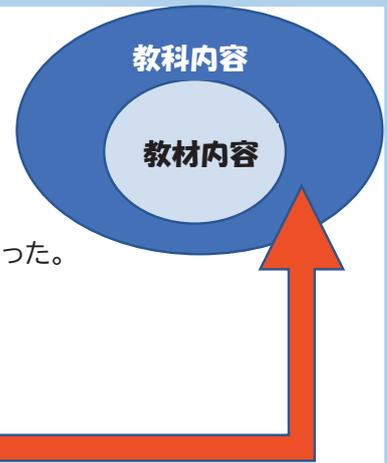
「何を教えるのか」が曖昧

→ 子ども達が「何を学んでいるのか」自覚できていない。

<教材内容>を教えてはいたが、<教科内容>として自覚して／されていなかった。

**教科内容 = 言語技術** を子ども達が、自覚的に獲得していく必要がある。

言語技術 = **言葉・文・文章への着目の仕方を具体的に示すもの**



## 3. 研究方法

### (1) 授業デザインの方策

#### ① 読みを深めるための言語技術の精選

小学校段階

各学年・各教材で学ぶ言語技術の洗い出し

→ 長期的な学習内容 = 教科内容  
学習指導要領 C 読むこと・教科書 を参考に

#### ② 言語活動の工夫

学習活動を通して学び(=言語技術)を自覚

- ・単元の目標との整合性
- ・言語技術を使って解釈する必然性のある教材
- ・子ども達の意欲を高める設定
- ・自力読みによる学びの自覚

#### ③ 話し合いたくなる学習課題の設定

「解釈のずれ」= 話し合いたくなる課題

- なぜずれが起こったのか考える
- 言葉・文・文章の捉え方の違いに着目

#### ④ 言語環境の構築

学んだ言語技術を学習用語として掲示→視覚化  
継続的に積み上げる学習内容

(=教科内容)を意識

- ・自分や他者の言葉を大切に作る学級作り

### (2) 検証方法

- ① 単元前後での感想の比較
- ② 授業過程における言葉への着目の仕方の変化を観察
- ③ 自力読みした物語の解釈を分析



- ・学んだ言語技術を使っているか
- ・言語技術によって解釈が深まった

### (3) 授業実践計画

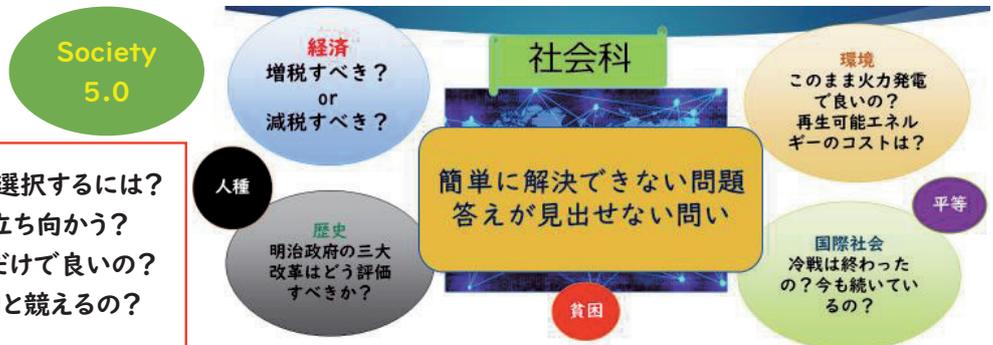
4月～6月	子ども達の見取り	子ども達はどんな言語技術を使っているか
7月	見取りを踏まえた第1回目の授業実践	
2学期	7月の実践に考察を加え、再度、授業実践	

# 多面的・多角的な思考を促す問いと授業の開発 ～パフォーマンス課題を通して～

学習デザインコース 浜田 洋平（指導教員 加藤 隆弘 端崎 圭一）

## 研究の動機

- ・幾多の情報から正しい情報を選択するには？
- ・答えの無い問いにどのように立ち向かう？
- ・物事を1つの側面から考えるだけで良いの？
- ・狭い物の見方や考え方で外国と競えるの？



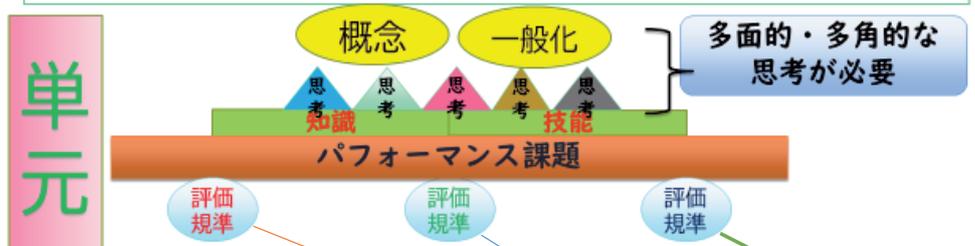
## 研究の目的

社会科授業において、多面的多角的な思考を身につける探究の魅力を自覚させるための、生徒の思考を揺さぶる発問や課題の提示を中心とした支援の在り方を検討する。

## 研究の方法

G. ウィギンズ「マクタイ  
「逆向き設計論」による  
パフォーマンス課題の設定

パフォーマンス課題とは  
効果的に行動するために知識を活用する課題  
現実世界で大人が遭遇しそうな問題解決場面の設定  
生徒・児童が覚えたことを単に再生するだけでは取り組めないような課題



研究対象の授業を4つの単元で行う。1期～4期と分ける。

1期～2期  
パフォーマンス課題に対してどのような考察を行うのか観察。多面的・多角的に考える視点を具体的に提示。できている生徒を授業中に価値づける。

3期  
パフォーマンス課題に対して考える視点を全体で共有。できている生徒を授業で価値づける。

4期  
教師の助言無しでパフォーマンス課題に取り組む。

評価規準を教師と生徒で共有

生徒のふり返りやワークシートの記述をもとに評価や価値づけを行う。



例：＜エネルギー政策＞  
原発により大きな犠牲を被った。しかし、原発によって、雇用や町の助成金で成り立つ地域が存在することも事実だ。また、再生可能エネルギー関連の設備には、費用の問題もある。世界各国と一緒にエネルギー政策に力を注ぎ、環境と経済のバランスを保つ必要がある。

# 中学校数学科の数学的活動における生徒による ICT 活用の有用性 :SAMR モデルに拡張型学習を取り入れた視点から

学習デザインコース 三浦 彩

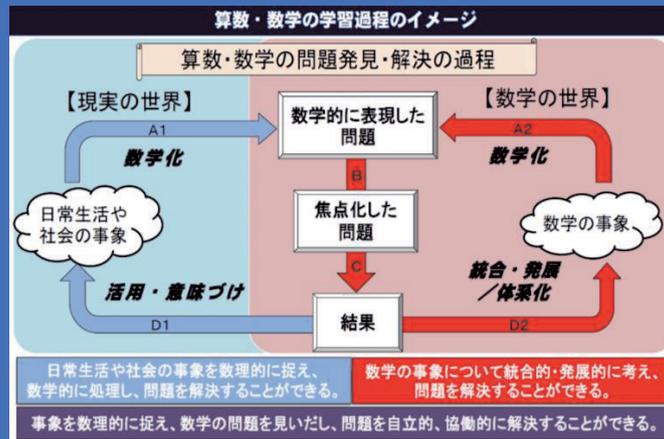
指導教員 大谷 実, 米倉 敏広

**研究目的** 数学的活動における ICT 活用の有用性を生徒の視点から明らかにすること。

## 研究背景

### 学習指導要領解説

解説(H29告示)では**数学的活動の充実**をより強調。問題解決する過程を重視することで、生徒は学び方のモデルを学ぶ。



### 授業実践の考察

教師の一方的な問いになっていて、生徒は**主体的に問題解決していない**。また問題発見は見過ごされている。

数学的活動を充実させるためには、生徒自らが問題発見、問いや気づきを持つことが必要。

操作・実験・観察・試行錯誤が可能…**ICT の効果的活用**が有効なのは？

## 研究方法

テクノロジー主語から**生徒主語**に移し、新しい枠組みを構築する。

### SAMR モデル

Ruben R. Puentedura(2010)  
テクノロジーが授業にもたらす影響による尺度。



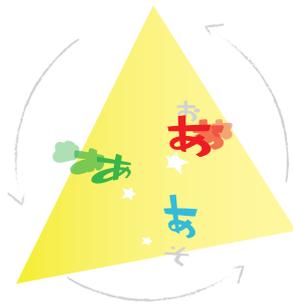
### 拡張型学習

Yrjo Engestrom(1987/2015)  
生徒が道具を媒介とし、新しい学習システムをデザインし実現する。

### 数学的活動



ICT を媒介としたときの数学的活動の質を、生徒の**数学的な見方・考え方**の様相から分析する。



# 思い付きを育てる 美術の授業デザイン

発達段階に応じた環境の構成に着目して

学習デザインコース 柳澤志貴武  
指導教員 武居渡/米倉敏広

## 研究の目的

子どもの発達段階に応じた教育の視点  
環境（ヒト・モノ・コト）の構成の視点 から  
思い付きを育てる授業デザインの方法を提案する

## 研究の方法

### ■授業設計の方法

第一次	第二次	第三次	第四次
題材 造形あそび			

題材の構成の第一次に、材料や用具に触れ親しむ時間として、材料とのかかわりから始まる「造形遊び」を組み込む。その中で生徒の材料や用具とのかかわり方を観察し、子ども理解の視点から、環境の構成を工夫し授業デザインを行う。

ヒト 教師のかかわり方 友達との関わり合い  
モノ 適切な素材の選定 用具の準備や作製  
コト 活動場所 場面設定

### ■検証方法

3名の生徒を抽出（なぐり描き期、意味づけ期、様式化前の段階）  
授業の様子を撮影し分析（インリアル分析の手法を活用）  
\*言葉によるコミュニケーションが可能な生徒については、会話を通じて思いを明らかにする

### ■実践計画

中・重度知的障害のある生徒を対象とした中学部の美術の授業  
1学期（4～7月） 描画を扱う題材、粘土を扱う題材  
2学期（9～12月） 木材を扱う題材、光と影を扱う題材

## 研究テーマの背景

中・重度知的障害の生徒を対象とした美術の授業で感じた難しさの原因は、「障害のある子どもの発達とその美術のねらいとは？」「思い付きはどのように生まれるのか？」この問いに自分自身が納得できる答えを持っていないことにあった。

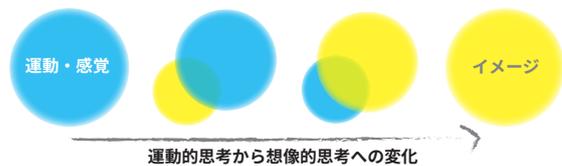
## 授業構想の観点

### 1 障害のある子どもの発達と造形表現の発達の関係

障害のある子どもの発達の特徴

- 基本的には障害のない子どもの発達の考え方と同じ
- 環境との関わりの中で生じる様々な難しさ
- 個人内での発達の不均衡
- 個人差の大きさ

造形表現の一つとしての描画の発達段階



描画の初歩の発達は、「かく」という行為を導くものが、運動・感覚からイメージへと変化するところにあり、身体面や認知面での発達と密接に関連している。

### 2 思い付きをどのように育てるのか

特別支援学校学習指導要領図工（小学部段階）では、「表したいことを思い付く」ことが大きなねらいとなっている。また思い付きには、材料から思い付くこと、自分の経験などを基に思い付くことの2種類が挙げられている。

それぞれの段階での思い付きはどのように育てることができるのだろうか？

#### ■イメージが先行する段階

経験からイメージが形成され、想像力はそのイメージ同士の結び付きから生まれるとヴィゴツキーが述べているように、イメージが先行する段階では、経験を増やしたり、結び付きの幅を広げることで、思い付きを育てることができると言える。



#### ■運動・感覚が先行する段階

幼児教育では、教育は「環境を通して行う」ものであり、教師のかかわり方も含めた「環境」の中に教育的価値を含ませることが重要だとされている。「行為」の誘発されるものとしての側面、「思い」の生成されるものとしての側面に焦点を当てると、それは環境を通して育てることができるものとなる。



#### 【参考文献】

- ・白石正久・白石恵理子編（2021）『新版 教育と保育のための発達診断 下』全隆研出版部。
- ・月本洋・上原泉（2003）『想像：心と身体との接点』ナカニシヤ出版。
- ・美術教育を進める会編（1991）『障害児の美術教育』あゆみ出版。
- ・V.ローウェンフェルド（1970）『美術による人間形成—創造的発達と精神的成長』竹内清ほか訳、黎明書房。

# 中学校数学科図形領域における統合的・発展的に考える力の育成 — 単元を貫く問題作りを通して —

学習デザインコース 漆田 健  
指導教員 大谷 実 川谷内 哲二

## 研究背景

中学校数学科の目標に「**統合的・発展的に考える力**」の育成が新たに位置付けられ、生徒にその資質・能力を育成するための指導と評価の在り方が課題となっている。

### 新学習指導要領

#### 統合的・発展的に考える力の育成

既習を生かす  
関連づけ

条件を  
変える

範囲を  
広げる

新たな  
視点でみる

### 新しい評価規準

#### 指導と評価の一体化

評価結果

指導改善

指導成果

再評価

## 研究目的

中学校数学科の第2学年の図形の証明において、「**統合的・発展的に考える力**」を育成するための**指導と評価の在り方**を提言する。

## 研究方法

統合的・発展的に考えること

の**意味の明確化**

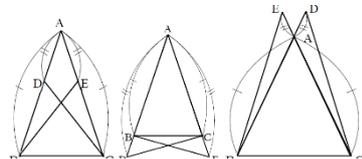
統合的・発展的に考えること

を「**方法知**」としての位置付け

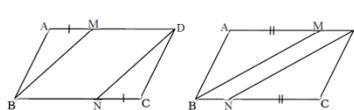
生徒が**方法知**を理解す

るための**3つの相**を設定

### 第1【二等辺三角形条件変更】



### 第2【平行四辺形条件変更】



### 第3【レポート分析】

- (1) 作った問題 (2) その問題の証明
- (3) 問題や証明と関連させてどのような考えで問題を作ったか
- (4) 問題を作ってみての感想

「三角形と四角形」の単元における実践イメージ

# 高校生が環境に対して科学的に理解し論理的に説明できる 授業方法

学習デザインコース 染谷 直希 指導教員 松原 道男・端崎 圭一

## 研究テーマの背景①

卒業研究にて石川県で義務教育を受けた石川県在住の1,000名にwebアンケート調査を実施。



「環境問題への意識」の質問において「意識していることは少ない」と回答した人の割合が50.8%であった。

## 研究テーマの背景②

持続可能な開発目標（SDGs）について「先進国を含む国際社会全体の開発目標として、2030年を期限とする包括的な17の目標を設定。」とある（文部科学省,2019）。

- ・目標13（気候変動）
  - ・目標14（海洋資源）
  - ・目標15（陸上資源）
- 環境保全や環境意識向上の必要性が考えられる。

## 問題の所在

- ・自然事象に対する科学的視点や探究を理科において学習する。しかし、それらを環境問題に対して適用する学習する場面や機会が少ないと考えられる。
- ・先行研究では、生物基礎の最後の分野である「生物の多様性と生態系」で環境を扱っているものが多い（小境・真山ら（2015）；山本（2016））。
- ・学習指導要領解説（2018）によれば「高等学校における「理科の見方・考え方」については、自然の事物・現象を、質的・量的な関係や時間的・空間的などの科学的な視点で捉え、比較したり、関連付けたりするなどの科学的に探究する方法を用いて考えることと整理することができる」という。



様々な単元で環境問題やその解決策に対して科学的理解を促し論理的に説明する機会を増やすことによって環境意識の向上に繋がるのでは？

## 研究目的

生物基礎において学んだ科学的な根拠を用いて、環境問題の要因や環境保全の方法について理解し、論理的に説明できる生徒を育成する教材や授業展開を明らかにする。

## 研究方法

- ・本研究で扱う「環境」 → **生徒にとって身近な環境問題やその解決策**
  - ・先行研究では体験型学習を用いた研究が多い（小境・真山ら（2015）；山本（2016））。
  - ・『生物の多様性と生態系』という単元だけでは生徒の環境に対する意識は高くない。
- 『生物の多様性と生態系』以外の単元で、基本的な内容において科学的な根拠を学習した後、環境問題や環境保全に関連付ける学習の構成
- 学習指導要領解説（2018）によれば「自然環境の保全や科学技術の利用に関する問題などでは、人間が自然と調和しながら持続可能な社会をつくっていくため、身の回りの事象から地球規模の環境までを視野に入れて、科学的な根拠に基づいて多面的に捉え、総合的に判断しようとする態度を養うことが大切である」とあり、対話やグループ活動が重要になると考える。
- 「生徒同士の意見交流やグループ活動」について考慮して、授業を展開する。
- （例）第2章『遺伝子とその働き』  
テーマ：地球温暖化と遺伝子組み換え技術  
地球温暖化の解決策の1つとして遺伝子組み換え技術を用いることに対して、グラフの読み取りやペアの人とは異なる資料の読むことをしてから話し合いを行う。

## 評価方法

単元末に自由記述式の質問用紙を配布し、そこに書かれている内容から評価・考察を行う。

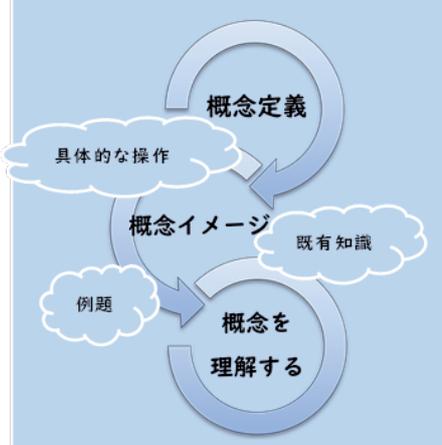
# 高等学校数学科における 概念定義と概念イメージの融合を促す授業デザイン

学習デザインコース 高橋 大祐  
指導教員：大谷 実 川谷内 哲二

## I. 研究の背景と問題の所在

数学では定義が極めて重要な役割を果たし、それらをもとに概念が形成される

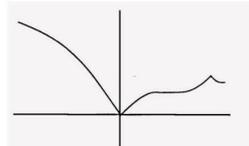
高等学校数学科の学びの流れ



数学的な文脈で意味をしっかりと理解して、  
知識を活用できるようになってほしい

数学では

問題が提起されたとき概念定義が参照されることを想定



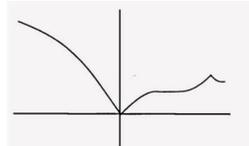
これは関数のグラフであるか？

関数とは  $x$  の値を決めると  $y$  の値がただ一つに決まる  
とき関数というから、これは  
関数のグラフである



実際は…

概念定義を参照せず、**概念イメージのみ**を扱っている

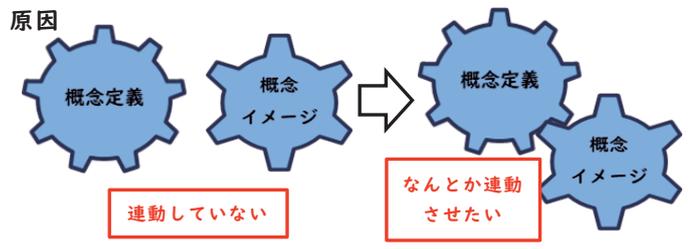


これは関数のグラフであるか？

今までは変化が一定だった  
グラフが関数のグラフ  
だったからこんな不規則  
な変化をするグラフは関  
数のグラフではない



生徒が持つ概念定義に対する**概念イメージ**は正式な概念定義とは異なる



## II. 研究の目的

高等学校数学科における概念定義と概念イメージの融合を促す要因を検討し、授業をデザインすること

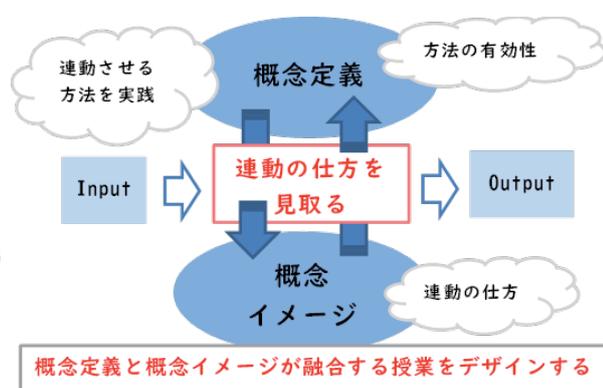
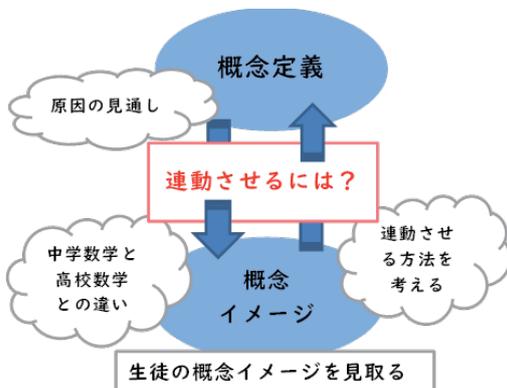
## III. 研究方法

4月～5月

6月～実践はじめまで

授業実践

分析



# 理解型授業を用いた 生徒の多面的・多角的思考力の育成を目指した実践研究

学習デザインコース 長 寛彰  
指導教員：加藤隆弘 端崎圭一

## 【研究背景】

### 社会科における授業タイプ

- ・ 問題解決型授業
  - ・ 説明型授業
  - ・ 意思決定型授業
  - ・ 理解型授業
- (内海 1971)

### 理解型授業とは？

「人間」の行為に視点を置いて社会を認識させようとする授業

(岡崎 2018)

### 理解型授業の問題点

- ・ 「できる限り多く詳しく知る」という常識的な社会認識となる危険性
  - ・ 特定の価値を注入し、態度形成をめざすため事実が選択されがちとなる。
  - ・ 価値判断力・意思決定力の育成を目指していない。
- (岡崎 2018)

### 問題点を解決した実践例

子どもたちが歴史的見方を意識できる  
社会科授業構成  
第6学年  
単元「政府・民衆にとっての世界進出」の開発を通して

(吉田嗣教・内田友和・中野靖弘・吉田剛人 2007)

## 【問題の所在】

### 社会科の目標

社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を多面的・多角的に考察したり、社会に見られる課題の解決に向けて選択・判断したりする力、思考・判断したことを説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。(中学校学習指導要領 2018)

### 筆者の考え

先行研究である吉田ら(2007)の実践では、多角的な思考ができていないかもしれないが、多面的な思考においては不足しているのではないだろうか？

## 【研究目的】

特定の価値を生徒に注入という問題を抱える理解型授業に工夫を加えることによって、生徒の多面的・多角的思考力を育成することができることを明らかにしたい。

## 【研究方法】

研究期間 4月～10月

対象学年 中学校第3学年

### 予想される単元

歴史的分野 第一次世界大戦から現代  
公民的分野 現代社会から政治

### 分析対象

- ・ 生徒の授業中における発言
- ・ ワークシート
- ・ 生徒のインタビューにおける発言

# 中学校数学科の授業における ICT 機器を用いた 思考力・判断力・表現力の育成

学習デザインコース 坪田拓都 (指導教員:大谷実、川谷内哲二)

## 研究の背景

- ・ 事象を論理的に捉えて考えることが苦手な子どもたち
- ・ どのように考えたのかを説明できない子どもたち

どう考えればいいの？  
どう説明したらいいの？  
どう表現したらいいの？



## 研究の目的

- ・ 「どう考えたのか」「なぜそういえるのか」を深められるような ICT 機器を用いた授業の開発
- ・ 思考したことを、子どもたちが ICT 機器を用いることでどのように表現できるのかを考察

## 研究の方法

- ・ 思考力・判断力・表現力とは何かを考察する
- ・ 思考力・判断力・表現力の育成と ICT 機器の関わりについて考察する
- ・ 来年度の実習で ICT 機器を用いた授業を展開し子どもたちの思考力・判断力・表現力の育成についての検討する



### 思考力・判断力・表現力

(2) 数学を活用して事象を論理的に考察する力、数量や図形などの性質を見だし、統合的・発展的に考察する力、数学的な表現を用いて事象を簡潔・明瞭・的確に表現する力を養う。

(新学習指導要領解説中学校数学編)

### 思考力

様々な事象を数学でとらえ、  
論理的に考察する力

### 判断力

既習事項との結びつきを考え、  
与えられた情報をどう活かすかを  
判断する力

### 表現力

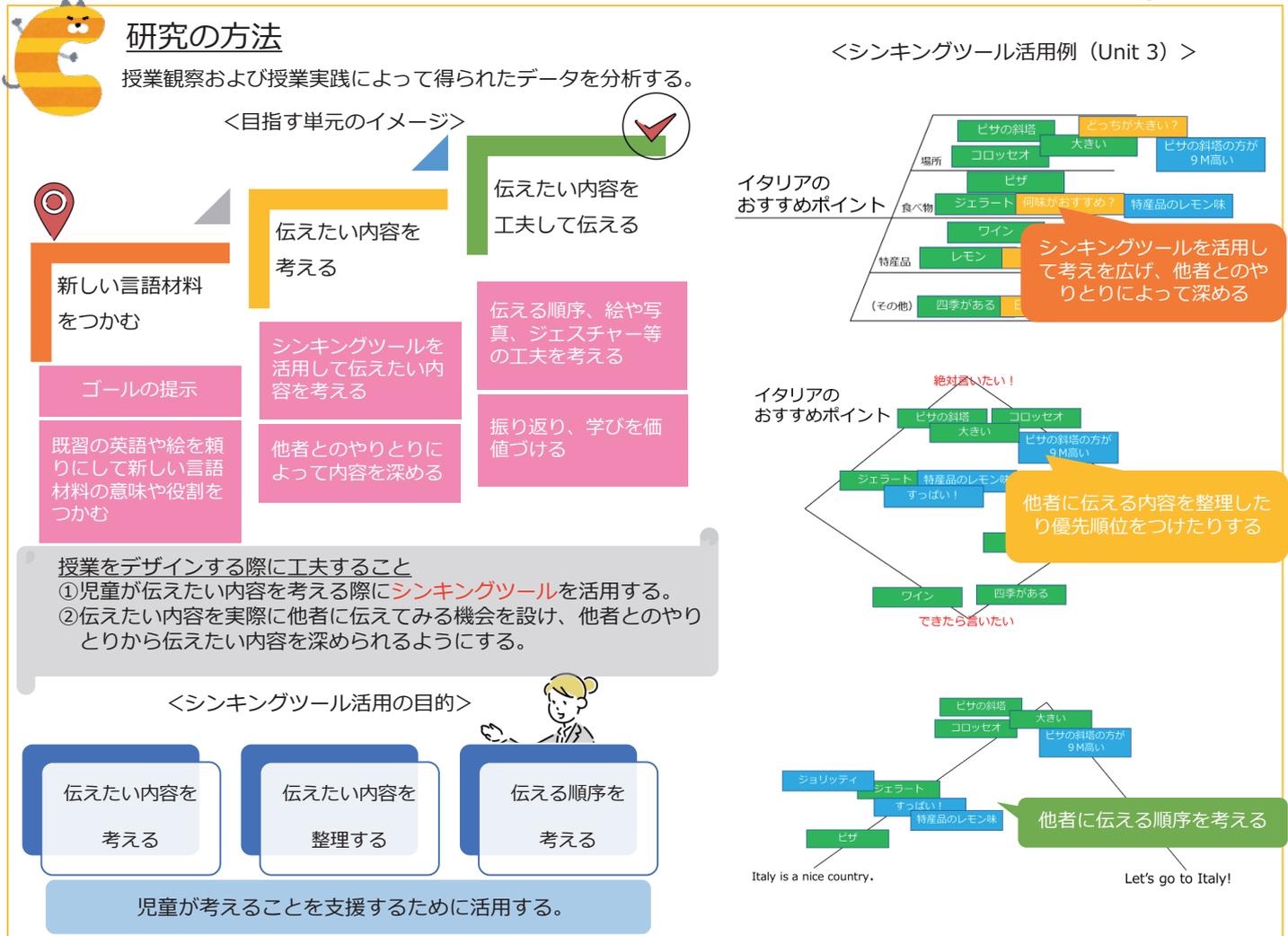
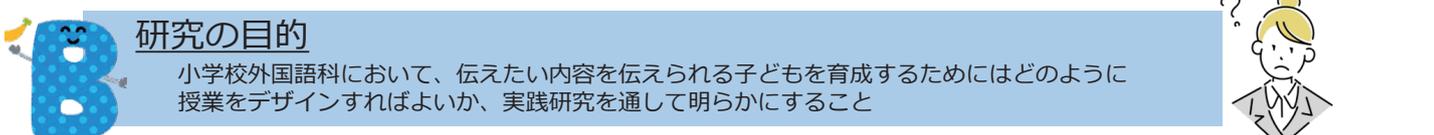
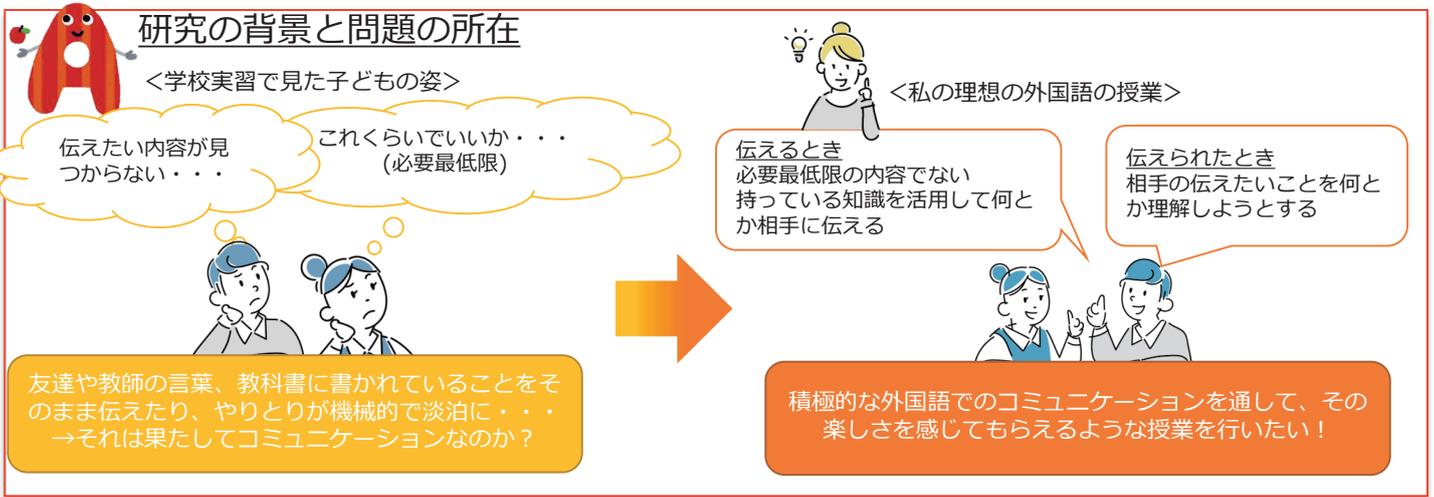
これら2つを数学的な表現を  
用いて示す力

## 実践計画

- ・ ICT 機器を用いることで子どもたちが自身の思考を深めることができているか、観察する
- ・ ICT 機器を用いて子どもたちが自身の思考をどう表現しているのかを授業で観察する

# 小学校外国語科において伝えたい内容を伝えられる 子どもの育成を目指した授業デザイン

学習デザインコース 松岡歩実（指導教員：滝沢雄一，端崎圭一）



# 「支え合い・共に生徒を見る」校内体制づくり



～「生徒理解の会」の機能化を目指して～ 学校マネジメントコース 北川 直美  
指導教員 萱原 道春 ・ 小浦 寛

課題意識

- ★多様な生徒に対応するには、教員が一丸となって関わる必要性!
- ★勤務校でのアンケート・インタビューからみえた課題
- 「学校の組織文化（個業傾向）の見直し」
- 「外部専門家との連携」

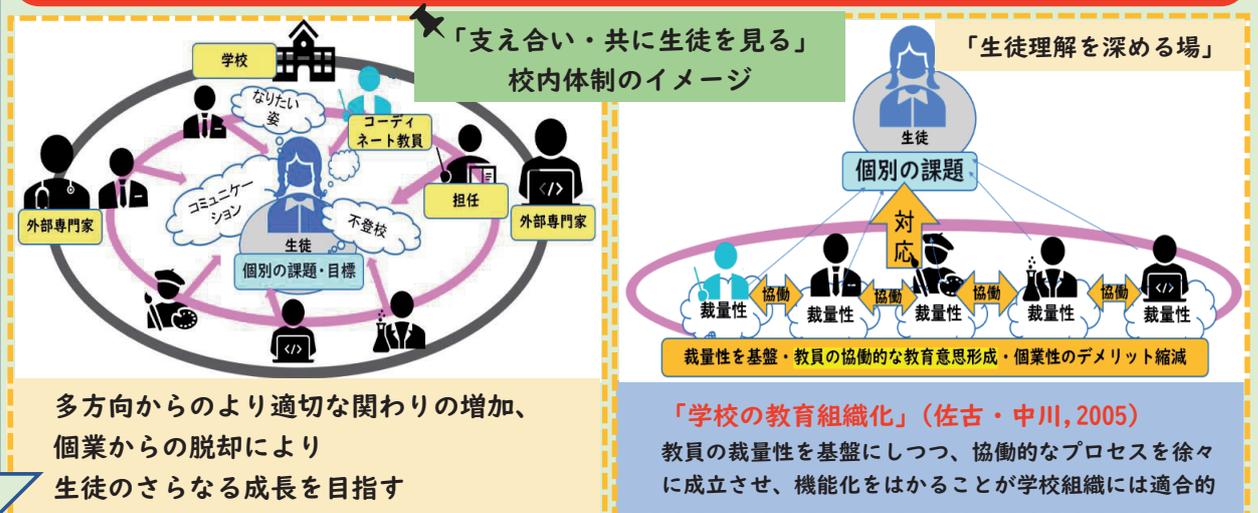
「個業型組織の課題」

(佐古・中川, 2005)

個別教員の知識や技能の範囲を超える場合、組織的な対応が困難、脆弱なシステムになる

研究の背景

**喫緊の課題：学校の規模や実情に応じた「チームとしての学校」の体制の構築**  
「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）」中央教育審議会（2015）



多方向からのより適切な関わりの増加、  
個業からの脱却により  
生徒のさらなる成長を目指す

「学校の教育組織化」(佐古・中川, 2005)  
教員の裁量性を基盤にしつつ、協働的なプロセスを徐々に成立させ、機能化をはかることが学校組織には適格的

研究の目的

「生徒理解の会」を設置し、「支え合い・共に生徒を見る」校内体制の構築を図り、「協働的な教育意思形成」の要点を明らかにする

「“教員の協働的な教育意思形成”」(佐古・中川, 2005)

学校教育に関する人々の間で、子どもの実態と課題の共有をしながら合意形成していくプロセスあるいは、共有すべき部分を明確化していく作業、それを通しての関係構築

研究方法

「生徒理解の会」をコーディネイト教員として運営・参与観察しながら、質的データを記述・分析するアクションリサーチの方法による実践研究

エピソード記録、個人インタビュー、質問紙法等

a. 組織体制の整備 (2022年4月)

★校務分掌への位置づけ

「生徒理解の会」・「コーディネイト教員」

★運営方法

- ・定期的に (2週間に1回・40分)
- ・職員室で (常勤教員 全員参加)
- 「対話」「外部専門家との連携」「研修」の場にコーディネート

b. 機能化の取り組み (2022.4月～11月)

★マネジメントサイクル R-PDCA の定式化

(佐古 2019 より引用)

〈みんなで考える・認識の共通基盤〉

生徒の実態と課題の共有 (R) ⇒ 目標の設定 (P)

⇒ 実践 (D) ⇒ 検証 (C) ⇒ 実践 (A) ⇒

★生徒理解を深めるための取り組み

- ・「生徒理解シート」の作成とその使用
- ・インシデント・プロセス法による事例検討

# サードプレイスの機能を有する若手教員育成プログラムの開発

学校マネジメントコース 小町成美

指導教員 鈴木瞬・新村裕二

## 1 研究の背景

- ・教員の大量退職、大量採用の時代
- ・ベテラン教員の豊かな経験や知識を若手教員に継承していく必要性

石川県若手教員早期育成プログラム

⇒校外研修 30%削減

- 負担軽減 △同期教員とのつながりが持てない

⇒校内研修の充実

- 自校の取組を学べる △現場の負担

珠洲市の小学校：若手教員の増加

- △校務分掌が多く、多忙感を抱えている
- △若手教員育成という視点がなくなりつつある
- △近隣校も同様である



## 2 サードプレイスの機能とは

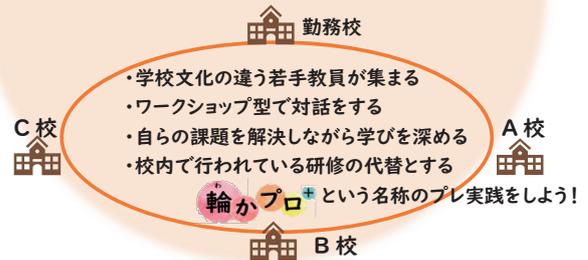
インフォーマルな公共生活の中核的環境  
職場でも家でもない環境(オルデンバーグ 2013)

心理的安全  
親密性 安らぎ  
刺激 居場所感



若プロに

このような環境要素を加えることはできないか？



## 3 プレ実践 概要・分析

【対象】

勤務校と近隣3校の若手教員 全14名

【プログラム】

- 自身で見つけた課題ごとにグループを作成
- 解決方法の検討➢解決に向けた計画立案
- 実施➢グループで共有

【事後アンケート結果(一部)】 数値:回答率

- ・グループで自分の意見が言えた 71.4%
- ・今日考えたことは、あなたの教員生活に生かせる 100%
- ・次年度も他校の先生とつながる輪かプロ+のような場があったらいい 100%



プレ実践で得られた特徴

輪かプロ+は、同年代の若手教員の交流の場

対話の場  
聞く 共有  
話しやすさ  
安心感 楽しさ  
すっきり ほっとする

新たな学びの場  
他校を知る機会  
新たな角度から考える  
手立てや取組を知る  
方向性やヒントを得る

このような場は自身の省察の場としても機能！  
課題と向き合う・課題が明確になる・考えの変容を生じさせる



若手教員は課題と向き合う中で  
どのように意識を変容させたのか？  
きっかけは何だったのか？  
どうしたら成長を実感できるのか？  
研究していきたい！

## 4 研究目的

サードプレイスの機能を意識した若プロを  
複数校連携で実施することによる  
若手教員の成長プロセスの解明

若プロを複数校連携で実施するための  
ファシリテートの実践的検討

## 5 研究方法

- プレ実践を生かし、年度当初に若手教員の課題や悩みに寄り添った1年間のプログラムを作成
- 対話を重視したワークショップ型プログラムを実施⇒開催後に選択式アンケートと記述アンケートを実施
- 選択式アンケートの集計及び記述アンケートについてはM-GTAで分析
- 参加者にインタビューを行い、インタビュー記録をM-GTAで分析
- ファシリテートした記録をアンケート調査やインタビュー結果と関連付ける



# 学級経営の基盤となるよりよい対人関係づくりの一考察 ～相互授業交流を核とした日常的取組を通して～



学校マネジメントコース 田中 天真 指導教員 萱原 道春・新村 裕二



## 研究の背景

- ◇自分自身、学級経営に悩んだ経験がある
- ◇悩みの中心の一つは**対人関係づくり**
- ◇同僚と話し合うことで**児童への関わり**に自信を持つことができ、新しい気づきもある
- ◇日常的に**学級経営を話し合う場**が大切！



- ◇子ども同士のいざこざに対しての**先生の関わり方**を聞いてみたい
- ◇学級経営の成功例を聞きたい！
- ◇学級経営について自分が普通だと感じていることは他の先生にとってどうなんだろう？



→学級経営が充実していくためには、①**教師と児童の信頼関係**、**児童相互の人間関係**を育てること②**教職員が連携**することが重要である。(□学習指導要領解説)このことは自身の経験、思いや勤務校へのヒアリングからも見えてきたことである。今後は、個による限定的な学びだけではなく、**同僚とともに学級経営を考える**ことが求められているのではないか？



## 問題の所在

学級経営の定義は広義である。その中でも、本研究では学級経営の充実につながる**授業中の対人関係づくり**に焦点を当てる。実践研究を通して、見えない行為であると言われている学級経営を見える行為にしていくことがポイントになる！



学級経営は、学級における担任の仕事の全ての仕事であるとされ、(□河合2010, 白松 2017) 広義で捉えられている。学級経営には多くの仕事があり、さらに教育実践の核でもある。

だが、**教師にどのような信念や思いがあり、そしてどのように子どもに関わるのか**を教職員同士が語り合い、**学ぶ機会**はあまりなく、学級経営は見えない行為であると言われている。(□末松, 2017)



## 研究の目的

- ①学級経営の基盤となる対人関係づくりの要点を明らかにする
- ②研修及び日常的取組を通して、教職員同士の理解が深まるための要点を明らかにする



## 研究の方法

- ◇相互授業交流は、学校研究の一環として本校で現在行われている、互いの授業を見合い気づいたことを伝え合う取組
- ◇本研究においても視点を与えて活用



学級への思い、子どもへの思いを参観者に伝える。



授業者の思いを知り、子どもへの関わり方を参観する。

参観後の研修では

- ①**授業者の思い、子どもへの関わり方**の意味を共有
- ②よりよい**対人関係づくり**について**相互意見交流**
- ③**授業者の子どもたちへの関わり**から学んだこと、考えたことを省察記録

- (1)方法
  - アクションリサーチの方法を採用
  - 教職員相互の姿の変容を具体的に記述
  - 研究者自身の省察も記録

- (2)対象
  - 研修は全教職員、日常的取組は若手の先生等

- (3)期間
  - ピリオドⅠ(1~3月)**  
ヒアリング 研究者と同僚との相互理解

- ピリオドⅡ(4月)**  
学級に対する思いや信念(学級観)の聞き合い 教職員同士の相互理解

- ピリオドⅢ(5~7月)** **ピリオドⅣ(8月~)**  
相互授業交流スタート 前期をふり返り、次へ！



教職員同士の「聞く」ことが土台。そのことが教職員同士の理解に繋がる。研修、日常的取組を通して技術的な伝達だけではなく、自己の実践をふり返る機会に！

# 個業から協働への変革を促す学年主任のコーディネートのあり方

－ 中規模特別支援学校小学部の学年会を中心とした取り組みを通して －

学校マネジメントコース 中屋 順子  
指導教員 萱原 道春・小浦 寛

## 1 研究の背景

### ◆社会の現状

学校現場が抱える問題が多様化・複雑化

個業型組織の問題が顕在化

個業型組織からの変革が必要

### 個業型組織の問題 〈佐古, 中川 (2005)〉

- ① 組織的な教育活動の改善や教育意思形成が困難
- ② 児童生徒の多様性や教育課題の複雑性が個別の教員の裁量を超える場合には組織的な対応が困難で脆弱なシステムになる

### 個業型組織

**統制化:** 管理職層の権限強化と行使、成層化等により、業務遂行を管理する。

**協働化:** 学校の課題や実践に関する情報等を具体的に即して相互の情報交換を活性化する。

個業型組織の変革には、校長の統制化と併せて協働化を行う必要があるが、**協働化がより有効に作用する** 〈佐古, 垣内, 松岡, 久保田 (2015)〉

### ◆本校の現状

特別支援学校に入学・転学する知的障害のある児童数が **10年で2倍以上に増加**

単級だった学年が、**複数クラスの方が多**い状態

学年間での**水平的な連携**が必要

学年の裁量に任されていて、**学年主任のコーディネート**によって働き方に差

**学年主任のコーディネート**を明らかにする必要性

### ◆参考になった昨年度のA学年主任のコーディネートのあり方



- ・教職員間の**業務調整が円滑**になり、**業務の質が改善**し、**業務が効率化**
- ・自身の考え方が「**自分の役割をどうこなすか**」から「**学年のためにどう行動するか**」に変化

学年主任のコーディネートのあり方によって**個業から協働への変革を促すことができる**のではないかと

## 2 研究の目的

**学年会を中心とした学年主任のコーディネートが学年団にどう作用し合い、協働的に働くことができるようになるかを明らかにする**

## 3 研究方法

◆研究対象：学年の教員全員

◆運営方法：学年主任の立場で週1回定期的に学年会議を行う

◆研究方法：アクション・リサーチ

変革目標（協働）が達成されなかった場合は、STEP1の「現状把握・分析」に戻り、考察・分析し、新しいサイクルを計画する

STEP1: 現状把握・分析

STEP2: 計画

STEP3: 実行

STEP4: 評価

STEP5: 知見の同定

4月・5月  
学年の現状を把握するために、ヒアリングや観察を行い、現状や問題の原因を分析・考察する

4月・5月  
STEP1の分析から、具体的に学年会でどのような働きかけを行うかを計画する

6月～11月  
計画したアクションを実行する

6月～11月  
実施した結果、どのような影響があったのか、現状の変化などを、観察やヒアリングから分析・評価する

12月・1月  
得られた知見を考察し、まとめる

---

金沢大学教職大学院オンラインフォーラム報告書（2021年度）

2022年6月15日 印刷発行

発行所 金沢大学大学院教職実践研究科

---